

古里爆音に追われ

消えぬ「なぜ」原告へ名乗り

2万2000人の

決起

第3次嘉手納爆音訴訟

海沿いの公園には、対照的な二つの記念碑が並んでいる。一つは、沖縄民謡「砂辺の浜」の歌碑。「砂辺浜下りて 語らなや今宵」と、この地の自然や風情をたたえる。もう一つは、1945年4月1日に米軍の本島上陸がこの周辺の海岸から始まったことを伝えるレリーフ。いまも激しい訓練が続く米軍嘉手納基地の源流はここにさかのぼる。平和と戦争。歌と爆音。同基地の滑走路南端に近い北谷町砂辺は、米軍との共存を強いられた沖縄の矛盾が凝縮された集落でもある。

北谷町の松田久徳さん



北谷町と嘉手納町のほぼ境界線上にある滑走路に向け、着陸体勢を取る米軍機。爆音の振動を感じるほど近い＝米軍嘉手納基地沿いの国道58号

同じ思いさせたくない。70歳の決断

地・家屋の買い上げ事業を使い、少し離れた同町桑江に転居した。集落では「移転第1号」ではないかといわれる。

松田さんの後を追うように、移転補償の対象となる世帯の6割がすでに区外や町外へと去った。国有地化された土地には植林が施され、住宅地のあちこちに点在する「偽りの緑」は、かえってもの寂しさをかき立てる。

松田さんの後を追うように、移転補償の対象となる世帯の6割がすでに区外や町外へと去った。国有地化された土地には植林が施され、住宅地のあちこちに点在する「偽りの緑」は、かえってもの寂しさをかき立てる。

父親の出身地である砂辺に松田さんが腰を据えたのは、30代になったばかりのころだ。70年代前半。すぐに昼夜を分かんない爆音に

虫食いの状態のような古里の姿に、松田さんは「なぜ自分たちが去らねばならなかったのか」との思いがいまも消せない。町職員として長く選挙事務に携わってきたこともあり、政治的な運動には関わらないことを

信条としてきた松田さんだったが、昨年ある決断をした。もう同じ思いはさせたくない。第3次となる嘉手納爆音訴訟の原告に、初めて名乗りを上げた。

宮森小学校への米軍機墜落事故。現場に向かう途中出会ったのは、血だらけになったかつての恩師だった。「先生っ」「早く逃げなさい！」。砂辺で米軍機の音が迫るたびに、あの鬼気迫る顔が脳裏にぱっと浮かんだ。(中部支社・鈴木実)

深夜早朝の飛行差し止めや損害賠償などを目的に、米軍嘉手納基地周辺に住む住民による第3次嘉手納爆音訴訟が28日、那覇地方裁判所沖縄支部に提訴される。司法の場で住民は何を訴えようとしているのか。その課題は、「決起」の意味を探る。

27面に続く

今こそ声上げる

2万2000人の

決起

第3次嘉手納爆音訴訟

1面から続く

北谷町の松田久徳さん



砂辺の字誌編集委員長を務める松田さん。「訴訟を通じて、沖縄の基地問題全体を見直すうねりをつくりたい」＝北谷町砂辺

松田久徳さんは砂辺で最も大きい門中の長男だった。古里を

離れたことは、アイデンティティーそのものにかかわる深刻な問題と言えた。残るか、それとも。矛盾する二つの答えのほ

ざまで疲れ果て、頭の後ろには2カ所も十円玉のようなはげが

できた。しばらくは帽子を手放せなかった。そのころ、隣の嘉手納町では住宅の防音工事が始まってい

た。ところが砂辺では、「工事をしたら基地を認めることにな

る」との意見がまだ根強かった。ここで暮らしていくには工

事するしかない。松田さんは覚悟を決め、国の担当者を公民館

に呼ぶ段取りをつけたが、住民の抵抗を聞きつけた担当者は途

中で引き返した。もうどうした

らいいのか、途方に暮れた。最後は子どもへの影響を考えて

移転を決意した。それでも車で10分ほどしか離れていない桑

江を選んだのは、少しでも古里の近くにいたいという未練の表

れにほかならない。

3年前、字誌づくりの話が持ち上がる

ると、編集委員長を引き受けた。「区民の方がふさわし

いのでは」という負い目を感じなかつたわけではない。それで

も身を引き裂かれる思いで地元

を後にした自分だからこそ、砂辺の歩んできた苦難の歴史を、

そして誇るべき自然や伝統を、

後世に残さなくてはならないという使命感に突き動かされた。

歴史的な政権交代が起きた2009年8月の総選挙。松田さん

は期日前投票の管理者を務めていた。つえを突き、あるいは家族に支えられて、投票に訪れたお年寄りたち。基地負担軽減

を求める県民の思いの深さを目の当たりにし、松田さんは目頭

が熱くなった。それなのに。新政権は発足後まもなく普天

間飛行場の県内移設に軸足を移し、あまつさえ一時は嘉手納統合案さえ組上に載せた。「黙っ

ていては現状を認めたことになる。声を上げなければ」。そんな危機感と怒りを、多くの県民

が政治信条を超えて共有しているように思えた。昨年に爆音訴訟の原告募集が始まると、基地従業員や軍用地主、若者、これまで訴訟とは距離を置いてきた人たちまでもが雪崩を打った

ように加わった。提訴が予定されるのは、1952年に沖縄が日本から切り離されて米国統治下に置かれてから59回目の4月28日。今度はその「屈辱の日」を、砂辺の静かな夜を取り戻す一歩にしたいと松田さんは願う。原告数は、日本の裁判史上空前の2万2千人に達する見込みだ。(鈴木実)

静かな夜取り戻す一歩

後世に残さなくてはならないという使命感に突き動かされた。

歴史的な政権交代が起きた2

009年8月の総選挙。松田さん

は期日前投票の管理者を務め

ていた。つえを突き、あるいは

家族に支えられて、投票に訪れ

たお年寄りたち。基地負担軽減

を求める県民の思いの深さを目

の当たりにし、松田さんは目頭

が熱くなった。それなのに。

新政権は発足後まもなく普天

間飛行場の県内移設に軸足を移

し、あまつさえ一時は嘉手納統

合案さえ組上に載せた。「黙っ

ていては現状を認めたことにな

る。声を上げなければ」。そんな

危機感と怒りを、多くの県民

が政治信条を超えて共有してい

安眠すらできない

2万2000人の決起

第3次嘉手納爆音訴訟

②

P3C哨戒機の前で勢いよく振られる手旗信号に応えるように、1時間半以上鳴り続けていたエンジン音がさらに高まった。20日午前3時48分、嘉手納基地海軍駐機場から響いた「ゴォー」という重低音は防音壁を飛び越え、寝静まった住宅地に広がる。騒音防止協定が日米で合意されて15年たつが、深夜のエンジ

不休の基地

調整音は連日響く。嘉手納町屋良の自宅屋上から駐機場を眺めた仲本兼作さん(38)は「ただ静かに休みたい。その小さな願いもここではかなわない」とつぶやく。仲本さんは滑走路まで約400m、海軍駐機場とは約20分しか離れていない実家兼中古車店で育った。しかし、故郷の「異常」に気付いたのは成人し、店を手伝い始めてからだだった。屋間離陸する戦闘機のジェット音をまともに受けると、思考が吹き飛ぶ。商談の電話

静寂破るエンジン音



ライトで照らされた嘉手納基地を眺め「深夜でも騒音がない日の方が珍しい」と語る仲本さん

|| 嘉手納町屋良

も相手の声が聞き取れず、「お待ちください」と謝罪を続けた。

常時20台ある販売車両は毎日磨きあげるが、基地の洗機場が稼働すれば、白く濁った

水が雨のように降ってきた。「仕事ができない。どうなっているんだ」

町役場に苦情を寄せても、「防衛庁(当時)を通じて改善を求めた」の一点はり。「住民の怒りは役場、防衛、米軍とフィルターを通すたびに薄まって伝わる」。個人での抗議に限界を感じ、第二次嘉手納爆音訴訟の原告団に参加した。

間帯の70%以上の騒音は昨年度、屋良、嘉手納の両地区で過去最多を記録した。屋良では09年度までの10年間、騒音回数が2210〜3808回で推移したが、昨年度は4523回。寝静まった時間帯に13回の騒音が発生する計算だ。

洗機場は2008年に移転し、「水害」はなくなった。代わりにP3Cが自宅寄りに駐機するようになり、エンジン調整を行う深夜騒音が増加した。

今回、町人口の35%に当たる約4900人が原告として参加する。仲本さんは原告の増加を喜び、「個人だと声が届かないが賠償できないくらい多くの人が立ち上がれば、日本政府も本気で夜間騒音を止める気になるのでは」と語る。

2万2千人の「包囲網」が基地と日米を取り囲んでいる。

(中部支社・新崎哲史)

嘉手納町によると、深夜早朝(午後10時〜午前6時)時

お経が聞こえない

2万2000人の

決起

第3次嘉手納爆音訴訟

③

「ゴオオッ」。2009年3月17日。嘉手納基地を飛び立った米軍機が、いつもと同じように爆音をどろろかせた。唯一違うのは、その日は父の四十九日の法要だったことだ。僧侶が唱えるお経は、何度もかき消された。

うるま市昆布に住む佐々木末子さん(63)の父・佐久川長正さんは2次訴訟控訴審判決

境界なき被害

の1カ月前の09年1月、10歳の生涯を閉じた。末子さんと共に訴訟を闘い、「勝たないといけない」と口にしていた原告の一人だった。

生前、爆音に邪魔されないようにイヤホンを耳に付けて、カセットテープがすり切れるほど古典音楽や民謡を聴いていた長正さん。

末子さんは、楽しみを邪魔され続けた父をせめて大好きだった音楽で送ろうと考えていたが、結局、法要の日も実家の頭上を米軍機がひっきりなしに飛び交った。「長生き

うるまで無念の法要



「嘉手納基地周辺地域の住民すべてが被害者だ」と語る佐々木末子さん(うるま市みどり町)

した人を安らかに見送ることにも許されないのか。最後まで爆音にさらされるなんて」。

怒りがこみ上げ、唄を聴かせられなかった無念さが、今もとげのように引かかる。

末子さんが生まれ育った昆布は、キャンプ・コートニーや貯油施設など米軍施設に囲まれた地域。集落周辺で起きた川崎ジェット機墜落事故などを目の当たりにしてきただけに「もし燃料タンクに落ちたら」と、恐怖が常に頭をよ

ぎる。「うるまに輪を掛けて危険な所だ」と思い知る。

3次訴訟原告2万2千人余のうち、半数が具志川・石川地区に住む。市職員だった原告団の平良真知事務局長(60)は「うるま市は飛行ルートの真下に位置している。W値(うるまさき指数)80以上の地域で見ても対象地域の半分近くを占め、原告数が多いのも当然」と話す。

訴訟が1次、2次と回を重ねるに連れ、住民には住まいが被害対象地域に当たるという理解が次第に広がった。自治会を中心に地域で説明会が開かれたことで住民の参加も増えた。だが、潜在的な原告はもっと多いはずだ、と末子さんは考えている。

「みんな被害者なのだから、本当は全世界が訴訟に参加してもいい。国が勝手に見えない線を引いているだけだ」

米軍機の騒音への県民の苦情はここ数年、勝連半島や与那原町など本島中南部の市町村に拡大。県は今年、実態調査に乗り出す。境界なき騒音被害の現実が過去最大規模の原告数に結びついている。

(中部支社・石底辰野)